

定量化 Tool を使いこなす！ ～Philips QLAB 編～

(株) フィリップスエレクトロニクスジャパン

Clinical Science 澤 政樹

近年、超音波診断装置の技術革新は著しく、新しい単結晶素子（ピュアウェーブクリスタル）の採用による画質の向上、演算処理の高速化と回路の高度集積化によるプローブの小型化により経食道心エコー検査においても、リアルタイム3次元心エコー検査が可能となってきました。

非常に多くの情報をもったこれらの2D・3D画像を、いかに定量化し臨床に役立てるかが課題であり、多種多様な定量化アプリケーションツールが装置に搭載されるようになってきました。

その代表的なものとして、2D画像では、2Dスペクトルトラッキング技術による局所壁運動評価や心室/心房容積の定量化機能、心臓同期不全（dyssynchrony）の治療前評価などが重要な役割をはたしています。

3D画像では、MPR（multi-planar reconstruction）法による任意断面の切り出し（iSlice）や、ボクセルデータを用いた精度の高い心室/心房容積・心筋重量の定量評価法があげられます。

本セミナーでは、「左房容積は2D画像と3D画像のどちらで計測したらよいか?」、「僧帽弁逸脱症の部位同定は3D画像だけで診断できるの?」など、これら定量化ツールを臨床現場でどの様に使用したら良いのかを具体的に症例を提示して、そのポイントとピットホールを解説したいと思います。

Philips超音波診断装置をご使用頂いている方はもちろん、最新の解析ツールを臨床現場ではどう使用するのか興味のある方に、日々進化するPhilipsQLABの最新定量化技術によって、明日からの検査のヒントが提示出来れば幸いです。